

【海外留学レポート】

## 海外医学部という選択肢

### － 国境を超えて医療をもっと身近に－

#### Choices of oversea medical schools

順天堂大学附属順天堂医院 総合診療科 国際診療部 医師 尾崎 功治

Dr OZAKI Koji

(Juntendo Hospital Department of International Healthcare)

キーワード：海外医療、インバウンド、医療ツーリズム

#### 1. はじめに

私は2008年9月から2014年7月まで約6年間北京大学医学部に留学をした。

両親ともに生粋の日本人であり、留学するまで中国はおろか海外と全く接点のなかった私が突如、海外留学を決意し、現地でゼロから中国語を学び、日本・中国両国の医師ライセンスを取得し医師になるまでのエピソードを紹介したいと思う。

これまでの私の留学経験がこれからまさに海外留学を考えている皆さんのラストワンマイルを後押しできれば幸いだ。

#### 2. 中国留学のきっかけ

子どもの頃から少し人とは違ったことをするのが好きだった。

はじめて医学に興味を持ち始めたのは中学生の頃からであったが、ただ医者を目指すのではなく「将来、医学を生業にするのであれば何か面白いこと、他人にはできないことがしたい」と考えていた。

中学を卒業後、県内公立高校に進学し日々テニスと趣味のパソコンに明け暮れていた私の目に偶然飛び込んできたもの、それが「中国」であった。

当時高校2年生であった2007年は翌年の北京オリンピックを控えて盛り上がる北京の街並みや熱気あふれる中国の様子が連日メディアで取り上げられており、圧倒的な人口と中国ならではのスケール感に加え、何とも言葉では表現できないほどの人々の活気に魅せられ、このとき漠然と「中国



語は将来、強い武器になる」と直感したことが留学のきっかけだった。

突然、中国への留学を決めた私に対して、周りの友人からはよく「両親は中国人なのか」「昔、中国に住んでいたのか」と聞かれることが度々あったが、前述の通り当時恥ずかしながらも中国語は全く話すことができず、いざ現地についても唯一話せる言葉、それは「ニーハオ」だけであった。

こんな私の無謀ともいえる留学を一番応援し支えてくれた存在は両親であり、そして現地で知り合った世界各国からの友人であった。

### 3. 大学生活

振り返ってみると語学研修や病院実習などを含めて中国で過ごした9年間は語学と医学に本気で取り組んだ9年間であった。お店でもタクシーでも言葉が通じず本当に苦労した記憶は今でも鮮明に覚えている。タクシーで運転手に目的地を告げるも、発音が正しくないことから目的地とはほど遠い場所に到着してしまうことや、出前でも注文したはずのない商品が届くことは幾度となくあった。今では帰国後の土産話として笑いの種にしているが、当時の私にとってそれは現地で生活していくことができるかできないかの死活問題であった。



左端が筆者

この言語の壁を打壊すべく、当初はまず予科コースという中国語だけを学ぶ1年間のコースに入学し、1年間でむしやりに中国語を勉強した。そんな私は語学が非常に不得意であった。中国語の漢字は簡体字で日本の漢字とは少し異なっていたが、似通った部分は多かったことからおよその意味は推測できたが、問題はリスニングとオーラルだ。発音が日本語とは全くことなり微塵も聞き取ることができなかった。

こうなると解決方法はひとつ、ひたすら勉強するしかなく、朝から中国語の授業を受講しては、午後自習室やカフェで猛勉強した。隣に座っている中国人にも沢山話し掛けた。今思うとコミュニケーションお化けだ。そして分からないことはスマートフォンに記録しては家に持ち帰って調べる、連日そんなことを繰り返し勉強をしていた。

結果、こんな私でも毎日中国語のシャワーを浴び続けることで兼ねてより心配していた言葉の壁は1年も経たないうちにあっという間に解決し、この時「人間本気になればなんとかなること」を実感し、今でもこの経験は私の中で忍耐の礎となっている。

語学研修を終えて晴れて大学生活が始まったが、6年間の大学生活は決して平凡なものではなく、

ほぼ毎月のように押し寄せてくる定期試験をはじめ、実験レポートの作成・提出に日々追われ続ける毎日であった。しかしいつも自分に「今の苦労は人生の中で踏ん張りどころ」と言い聞かせ己を奮い立たせながら、目先の試験や勉強に常に全力で取り組んできた。

#### 4. 卒業後の進路

6年間の医学部生生活を終え、無事に北京大学を卒業してからは国家試験の連続で時間はあっという間であった。中国での1年間の病院研修を経て2016年に中国の医師免許を取得。その後日本に帰国し、翌2017年に日本の医師免許も取得し、約10年余りの歳月を経て、日本で医師として、キャリアをスタートさせることができた。

現在は都内大学病院に新設された国際診療部にて海外から先進的な日本の医療を求めて来る外国人患者の受け入れ業務をメインに行っている。来日する外国人のうち大半を占めるのは中国からの患者であり、中国医療に関する知識や語学力を日々存分に発揮できる最高のステージだ。現在も毎月のように中国と日本を行き来しながら、日本・中国における医療の架け橋として医療の国境をさらにボーダーレスにするため日々職務にあたっている。

国が違えば保険制度、文化、習慣、医療に対する知識・背景、何もかもが違う。これを一つ一つ課題解決していくことが今の仕事の最大の醍醐味だと私は確信している。

今後、国際診療部という職場で培った取り組みをもとに、よりスムーズかつ安全に海外の患者を受けいられる仕組みを構築し、全国の医療機関にとってもモデルケースとして求められるような体制を作り上げていくことが長期的な目標だ。

#### 5. まとめ

一言で「留学」といっても、住み慣れた日本を単身離れ、異国の地で生活・勉強するということにはそれなりの度胸と覚悟が必要だ。そして留学は一人で成し遂げられるものではなく、家族を含めた周りのサポートも必須条件であることを忘れてはいけない。

私自身の考える使命は、常にグローバルな観点でこれまで届かなかった患者へ確実な医療を届けること。今こうしてこれまでの海外医療の経験を自分にしかできないポジションで発揮できることにこの上ないやりがいを感じている。まずは得意とする中国、次いで世界中の医療機関が連携して患者の治療が行えるような世界を思い描いている。本当に治療を受けたい患者が最低限のコストで治療を受けられるような世界を作ることに生涯チャレンジしていく心積もりだ。

海外へ留学し結果を得ることは決して容易なことではないが、逆を言えば実現できないということもない。アグレッシブな若い時期だからこそ挑戦できることもたくさんあると私は思っている。少し遠回りをしてでもやりたいことを目指して突き進むことは長い人生から見るとほんの一瞬の出来事

であり、これから留学を考えている皆さんについては「将来のなりたい自分」を目指して自ら切り拓き突き進んでいってくれることを期待している。